あいつは誰にも渡さない。

亜純　玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あいつは誰にも渡さない。

【Ｎコード】
Ｎ４７４７Ａ

【作者名】
亜純　玲

【あらすじ】
コナンと哀は、哀の造った完成品の解毒剤を飲みもとの姿に戻った。コナンは元に戻り工藤新一となり、哀は宮野志保となった。志保は帝丹高校に通うことになる。新一はすぐに蘭に電話をかけるが蘭の様子がおかしい・

第一部　『工藤新一』（前書き）

この小説設定の非難やカップリング等の批判は一切受け付けません。
（カップリングが嫌だ・〇〇が最低・この設定が嫌いｅｔｃ．．）

第一部　『工藤新一』

ＰＰＰＰＰ・・・・・・！

「はい、毛利探偵事務所で――」

「蘭！蘭か！？」

「し、新一！？まったくもぅ、何なのよこんな時間に～。」

・・・・・・・・・・え？

「・・・・・本当に、蘭か・・・・？」

「えっ？私だけど、どうしたの？」

おかしい。蘭はこんな反応するわけがない・・・・いつも電話するたび泣く奴だったのに・・

新一はついさっき博士の家で哀が完成させた薬を飲み、元の姿『工藤　新一』に戻ったのだ。そして、ずっと待たせていた蘭に電話をしていた。が、思っていた反応と大幅にずれたので新一は驚いた。

「どうしたの、新一ぃ～？」

いや、気にしない気にしない。さてと気を取り直して・・・・

「いや、何でもない。返ってきたから電話しただけ・・。明日から学校行けっから、また迎えに来てくんねぇか？」

「え？まぁいいけど・・・。」

「けど？」

「ううん、何でもない！じゃあ明日行くから寝坊しちゃだめよ！」

「おう！」

「じゃ、バイバイ♪」
ガチャッ

「どうも、蘭の様子がおかしい・・・・。まぁ気にする事ねぇか！あいつの事だし・・それよりも今日は疲れたから寝っかな！おっとその前にみんなにも連絡しとくか。」
ＰＰＰＰＰＰ・・・・・！
「はぁ～い、服部です～・・・。」
ガクッ
気の抜けた返事に新一は一人でこけてしまった。

「服部か？俺・・・・工藤新一だけ――」

新一が話し終わるか終わらないうちに服部が急に喋り始めた。
「おぉ！！工藤か！？元に戻ったんか！？あ～俺、そんな気がしとったんや～。何でも今日はなんだかわからへんけど、全然眠くならないんや。やっぱり親友やからそんなことまで分かるんやな～・・・・。」

・・・・・・・・・・・最初はマジで眠そうだったぞ。

と、一人で突っ込みながらも勝手に喋り続ける平次に新一は受話器を下ろして言った。
「・・・・切るぞ。」
「あ～悪ぃ悪ぃ。つい興奮してしまってなぁ、んでなんか話があったんか？」
「いや、別に報告しておこうと思っただけだから、何でもない・・・。」
「そうか、ほな今度俺ン家遊びにこいや！いい所やで～大阪は。」
「あぁ。こ・ん・ど・な！」

「そんじゃ、ほなな。」
ガチャッ！
新一は「ほなな。」が聞こえるか聞こえないうちに電話を切った。
「・・・はぁ。服部と喋ると終わらなくなるからなぁ～。もう寝るか。」
そういいながら時計を見ると深夜の一時だった。
「ゲッ！もうこんな時間じゃねぇか。急いで寝よっと・・・。」
新一は急いで二階へ上がり自分のベットに入るとすぐに寝いいってしまった。

本当にぐっすり眠ってしまっていた。

今のうちにぐっすり寝てしまっていたほうがいいだろう。
これから先、当分そのような眠りにはつけないだろうから・・・・

第一部　『工藤新一』（後書き）

＃作者より＃
どうも初めましてｏｒお久しぶりです＾＾
亜純玲（アズミレイ）と申します。
この度は「新　名探偵コナンノベルズ」が誕生したと聞きまして、改めて小説を投稿させていただきたいと思います。
今回の小説「あいつは誰にも渡さない」は私が「ワタマー」で旧名探偵コナンノベルズの時に連載させて頂いていた作品です＾＾コレが初めての作品だったので、未熟（今も；）な面もあり、読んで下さった方から素晴らしいアドアイスを頂きました。中には「好きです！」と言って下さった方も居て、本当に嬉しかったです／／／／／そして何故今回もこの小説投稿したかと言うと、そのアドバイスして下さった方の気持ちをそのままにしないで生かしていきたいなーと思い、話はあまり変えずに微調整をしながらも再度投稿させて頂きましたっ
出来るだけアドバイスを生かす様に心掛けたのですが（出来る範囲内）どうでしたでしょうか？
出来ればまたこの小説の感想＆アドバイス等頂けたら嬉しいです＾＾
宜しくお願いします！！！

第二部　『宮野志保』

ピンポン　ピンポーン！！

ガバッ

新一はベットからはい起きて自分の手や顔を鏡などでマジマジと見つめた。

「・・・・・・戻ってる。やっと『工藤　新一』に戻れたのか。」

昨日から分かっていたことだが改めて分かると嬉しい事だ。

だがそんな嬉しさも玄関のチャイムの音で消された。

・・・・ったく。誰だよ、こんな朝っぱらから！

新一は嫌々と制服に着替えながら下へ降りていった。

ピンポーン　ピンポーン！

「はいはい。今開けますよ！」

そう、ぶつぶつ言いながら新一は玄関の戸を開けた。

そしてチャイムを鳴らしていた本人の顔を見ると言った。

「おい、蘭！！いい加減にずっとチャイム鳴らしてんのやめろよな！」

相手は蘭であった。

「新一こそずっとチャイム鳴らしてあげてるんだから早く出なさいよぉ！」

蘭がプンプンして新一の顔を見ながら言った。

・・・・ったく・・・なんで俺が怒られなくちゃいけねぇんだよ。

新一は呆れた顔で思っていた。

「もう！まぁどうでもいいけど、早く行こうよ。学校遅れちゃう！！」

「おいおい、俺、まだ飯食ってねぇんだけど・・・・。」

「えぇ～！？まだ食べてないの？しょうがないわね、作ってあげるから中入っていい？」

相変わらず世話好きだなぁ

まぁ、そんな所が良いんだけどなっ・・。

新一はフッと笑って蘭を中へ入れようとした。そのとき、

「工藤君？」

と、新一を呼ぶ声が聞こえた。

聞き覚えのある声だ、と思って振り返るとそこには宮野　志保が立っていた。

「あぁ、宮野か・・。」

「あら、今朝はガールフレンドと朝食かしら？」

「んなわけねぇだろ！こいつが玄関のチャイム鳴らしまくってるから・・・！」

側にいた蘭を見つけて冗談のつもりで言ったのに新一が子供の様にムキになるので志保はクスッと笑った。

「新一、この方誰？」

今まで喋らずに黙っていた蘭にはよく分からないまま不思議に二人の会話を聞いていた。

「あら、ごめんなさい。私は今日から帝丹高校に転入する事になった宮野志保。宜しく、蘭さん。」

綺麗な顔立ちとスラッとした体型、それから自分の名前を知ってい

るのに蘭は驚いた。
「あ、あの何で私の名前を知ってるんですか？」
「フフッ。あなたの事ならよく工藤君に聞かされたわ。」
「お、おい！宮野！！」
「一日に一回は絶対聞かされたわ。」
志保は、ムキになって顔を真っ赤にして騒いでいる新一を無視して言った。
「へぇ～、そうだったんですか。新一ぃ～？何で今まで志保さんのこと話してくれなかったのよ！」
「別にいいじゃねぇか・・。」
「まったくもう、そう言って新一はいっつもいっつも・・！」
「だからぁ・・！」
二人のやり取りを聞きながら志保は思っていた。

良かったわね・・・・工藤君

だがその顔は優しそうな顔をしていたが、悲しそうな顔もしていた。

「ねぇ、そろそろ行かないと遅刻してしまうんじゃないかしら？」
十五分ぐらい言い争っていた蘭と新一に呆れて言った。
「えっ！？」
「ゲッ！！」
二人で同時に時計を見て言った。
「だから、言い争いは後でやることにして、・・・早く行きましょ？」
『・・・・・はい。』
二人は赤面をしながら言った。
長い沈黙が終わった後、
「あ、飯・・・ま、いっか！んじゃ、行こうぜ！」

「・・・うん！」「そうね。」

三人は学校へと走っていった。

第二部　『宮野志保』（後書き）

＃作者より＃
どうも、亜純玲（アズミレイ）です＾＾
「あいつは誰にも渡さない第二部」を読んで頂き、ありがとうございます！
今回もあまり変わりませんが、少し字間を狭くしてみました＾＾
これからも宜しくお願いします！

出来れば小説評価・感想＆アドバイス等よろしくお願いします＾＾

第三部　『異変』

キーンコーンカーンコーン・・・・・・・・

「うぉ！ヤベェ！！」

「んもう、新一がケンカ売ってくるから悪いんじゃない！」

おいおい、こーゆーのはどっちもどっちじゃないんですか？毛利サン・・

新一はブツブツ言いながら、蘭と志保と帝丹高校へと走っていた。
新一はついこの間、哀（志保）が造ってくれた解毒剤を飲んだ。
江戸川コナンは工藤新一に、そして灰原哀は宮野志保へと元に戻った。
蘭の反応で少し気になるところもあるが、まぁとりあえず蘭に志保を紹介して久々に学校へ行くことになった。

「ちょっと、なぁに～新一？何か言いたそうねぇ。」

「何でもありませン、すみませン。」

蘭がニンマリと、ものすごく暗く恐い顔を作ったので、さすがの新一もびくついたらしい。
素直に謝った。

「おい、それより早くしねぇとヤバイんじゃねえか？」

「そうね。復帰早々から遅刻よ？」

「あぁ～～ホントだ！早く行こう、新一！志保さん！」

そう言って三人は普通のペースよりも一段上にあげて全力疾走で走って行った。
そのとき・・・

ガク！！！！

新一の足がもつれてひっくり返ってしまった。
「痛って～・・・！！」
「大丈夫？工藤君。」
「ったく。何でこんなところに段差があるんだよ、いつから出来たんだ？」
「まぁそんな事はどうでもいいけど・・・ホラ、早く行かないと彼女、行っちゃうわよ？」
「へ・・・？」

そのとおり。
新一が転んだと知っているのに学校へと行ってしまったのだ。
「新一ぃ～！？早くしないと遅刻よ！先に行っちゃうからね～っ！」
「え？・・・おいおい、待てよ。蘭！！」
思わぬ言葉に新一はビックリしていた。

そんな・・・こんなの前の蘭じゃない・・・・どうしたんだよ！？
俺がコナンの時なんかもっと優しかったじゃねぇか

「彼女、何か変ね・・・。」
新一が呆然として座っているので志保は新一の行動と蘭の今の言葉で何か違和感が感じられたらしい。
「クスッ。まさか、もう貴方の事がどうでもよくなってたりして・・・。」
「そんな・・・。」

「あ。く、工藤君？冗談よ冗談！本気にしないで！」
志保は冗談半分のつもりで言っていたらしいが、新一には冗談に聞こえなかったらしい。

蘭・・・・・ウソだろ？
マジじゃねえ・・・よな・・・？

もし本当だったら、俺・・・・・。

「まっ、こんな事しょっちゅうの事だし。行こうぜ、志保！」
「・・・・。」
（顔ひきつってる。口が本当に笑ってない・・・絶対強がってるわね・・・。）
「おい、早く行こうぜ？遅刻する・・。」
「もう、遅刻してるわ。」
「ゲ・・・。」

新一は校門の前に立ってどうしようか考えていた。
その時、新一がひらめいてポンと手を合わせた。
「おっ！いいこと思いついた。」
「何？」
「志保！お前は今日からここの学校来るんだったよな？」
志保は呆れた顔をしていった。
「は？あたりまえでしょ。それとこれと何の関係あるのよ？」
「お前がここに転校するのが不安で家で閉じこもっていた事にするんだ。」

・・・は？（←志保）

「ちょ、ちょっと工藤君？私、全然不安じゃないわよ？」
少し呆れながらも小馬鹿にしたような口調ぶりで志保が言う。
「あ～～～っだから！遅刻しちまったんだから他に何も思いつかないんだよ！！」

ったく、こいつよく遅刻してんのにあわてねぇな・・

「・・・まぁ良いわ。それじゃ早く案内してくれる？」
「へ？どこに？」
「はぁ・・・・。あなたって・・・・。」
「何だよ？」
志保は呆れすぎて口が開かなかった。
「何でもないわ・・。校長室に案内してくれるかしら？」
「え！？俺がぁ？」
「当たり前じゃない！私一人でなんて言えばいいのよ。そんな恥ずかしい事・・。」
「ま、まぁともかくあとは頑張ってくれたまえ、志保クン・・。」
新一はムリに笑ってみせながら言った。
「あら？もし、彼女とだったら一緒に行くくせに、私とは行ってくれないのかしら？」

少しの間恐怖の時間が過ぎた。
だが、新一も志保には勝てないらしく、ついにおれた。
「わぁ～ったよ！行けばいいんだろ？・・・いえ、一緒にイキマス。イカセテイタダキマス。」
志保がうんと睨みつけたので怖気ずいてしまった。
「そう、それでいいのよ。じゃ、早く行くわよ。」
ズルズルと志保に引きずられながら新一は校長室へと向かった。

悪夢・・・・・・・・・・・・・・

第三部　『異変』（後書き）

＃作者より＃

こんにちは！！

「あいつは誰にも渡さない。第三部『異変』」を読んで頂きまして、ありがとうございました＾＾

今回も少し修正＆調整などをして分かりやすく読みやすく（？）できていたらなぁーと・・・思います！

ですので、どうぞ小説評価・感想・アドバイス等など、宜しくお願いいたします＾＾

第四部　『黒羽快斗』

ガラッッ

「ふぅ。危なかった～、ギリギリセーフ！それにしても・・・・ったく、新一ったら・・・・。」
蘭はブツブツ言いながら自分の席に着いた。
幸いまだ先生も来ていないらしく、教室は女子が雑誌を見て騒いだり男子が教室の後ろで走り回っていたりして騒がしかった。

「あ、らーん！おはよ！！」
そこへ茶髪でストレートの髪の女子が雑誌を持って蘭の方へと走ってきた。
「あ、園子～。おはよう！」
彼女の名前は『鈴木　園子』。
蘭の親友であり、鈴木財閥のご令嬢である。

「ねぇ、新・・一君戻っ・・てきた・・んでしょ！？」
園子は走ってきたせいか息切れをさせながらも途切れ途切れに言った。
「あ、うん。何で分かったの？」
「・・・何でって？そりゃさ、あんたの顔見ればすぐピンとくるわよ～。何だかすっごく嬉しそうな顔して入ってくるんだから、まったく。」
「え！？そんなに嬉しそうだった？」
「そりゃあもう！すっごく嬉しそうだったわよぉ。・・・はぁ、やっと待ち続けたかいがあったわ！大好きなあの人がやっと帰ってきてくれた・・・。私にもう、怖いものなんて何もないわ！・・・・・

・なぁ～んて思っているような顔してたわよ～？」
園子は両手を胸に当てて熱演した。
「ちょ、ちょっと園子！？私は、新一なんて好きじゃないっていったでしょ？あいつとはただの幼馴染！・・・それに、もう私にはいるでしょ？」
蘭はまた始まったとでも言うような顔をしている。
「ゴメンゴメン！つい、いつものノリ！！・・・それにしても、その事言ったら工藤君、傷つくわよね。」
「え、何か言った？園子。」
「あぁ～、なんでもないなんでもない！あっ蘭、黒羽君きたわよ！」
「えっ！本当？」

ガラッ

蘭はビックリして前を振り返ると、そこには『黒羽　快斗』がいた。
「はーい、じゃあ私は向こうに行きま～すっ・・あ、黒羽君おはよ！蘭はここにいるわよ～ん！じゃね、蘭！」
園子は悪戯っぽい笑顔を見せて、そそくさと後ろの女子の方へと走っていってしまった。
「なによ、もう。あ、快斗おはよう！」
蘭はにっこり笑って言った。
「おう！久しぶりだな～。」
「なぁ～にが『久しぶりだな～』なのよ、いっつも会ってるじゃない。・・あっ園子、雑誌忘れてる。快斗、ちょっと渡してくるね！」
蘭が椅子から立ち上がって渡しに行こうとしたその時、
「蘭、いいよ。お前はそこに座ってろ。俺が届けてくるから・・。」
快斗が蘭の腕をつかんで椅子に座らせた。

「はァー・・・・。いいわよねぇ、あーいうカップルって・・・まったく！見つめ合っちゃってるし～。」
「ホントホント！っていうか蘭ちゃんと快斗君って付き合ってるんでしょ？」
「ホ～ント、いいよね。私なんてまだまだなのにィ！！」
「それに快斗君・・・・かっこいいよね～っ！」
後ろにいた園子と他の女子たちが蘭と快斗の様子を見ながらこそこそと喋っていた。

「・・・ねぇ、そういえばさっき園子言ってたけど本当なの？」
「ん？何が？」
園子の隣にいた女子が急に声を潜めて喋りだしたので、皆耳を傾けた。
「・・ホラ、さっき言ってたじゃない！・・・工藤君が帰って来たって！」
「えっ！帰って来たの！？」
「うん。さっき蘭が言ってたよ。」
園子が言った。
「・・・だから新一君、可哀想だなって思ってたのよね・・。」
「えっ？何で～？」
「・・だってさ！ホラ、新一君って蘭の事好きでしょ？」
『うん、うん』
皆、声を潜めて言った。
「だから、蘭と黒羽君が付き合ってるって知ったら～・・・。」
「あぁ、そっか！工藤君かわいそー！！」
「ホントホント！倒れちゃうんじゃない？」
園子や他の女子たちがいっせいに納得して大声を上げたので、一斉に注目があびてしまった。
「あー何でもないよぉっ！」等と赤面になりながらも誤魔化してま

た例の話題へと移した。

「そういえばさぁ、工藤君と快斗君って似てない？」

「うんうん。私もそう思ってたぁ。」

「あっ、そういえば前に蘭と渋谷に行った時、蘭が新一君に似てる人見たんだって。だからそれ快斗君だったんじゃないかな？」

「あっ！絶対そうだよ。工藤君と快斗君って双子みたいにそっくりだし！かっこいいし～。」

と、いろいろ話している時後ろから、

「はい。お嬢さん方？雑誌をお忘れですよ。・・私に何か用ですか？」

快斗が甘ったるい声をして、雑誌を渡して来た。

「あ、いえ。何でもありません！雑誌ありがとう・・。」

女子の1人は快斗のとりこになってしまっているようだ。

「そうですか？工藤とか何とかと、聞こえたような気が――」

「いえッッ！！本当に何でもありません！雑誌ありがとうございましたぁッ」

「・・・？どういたしまして♪」

ポンッッ

快斗は少々不可解な顔をしながらも、にっこりと笑顔をつくってバラを一輪すぐ側に居た女子に渡した。すると優雅に蘭の方へ帰って行った。

何分かずっと女子たちはポ～っと頭が上の空になっていた。

快斗は新一が居なくなってからの転校生なので随分と人気をあびていたのだろう。

「・・・ね、ねぇ。今、快斗君かっこよかったよね・・っていうか素敵・・・。」
「う、うん。あたしあんな感じの人タイプ・・・・。」
園子たちは、バラを見ながら意識を取り戻して自分達のタイプを話してため息をついた。
「・・・でも蘭がいるから。無理よね・・・・。」
「はぁ～・・・・。」

第四部　『黒羽快斗』（後書き）

＃作者より＃
どうも、亜純玲（アズミレイ）です＾＾
「あいつは誰にも渡さない。第四部『黒羽快斗』」を読んで頂きまして、ありがとうございます！
今回出てきた快斗君は新一君とは初対面と言う設定になりますので、宜しくお願いしますっ

それでは少ないですが小説評価・感想・アドバイス等を宜しくお願いします＾＾

第五部　『驚愕な事実』

蘭のほうへと帰って行った快斗は・・・・

「ちょっと快斗！？何で園子たちにバラなんてあげてるのよ～・・・・。しかもあんな甘ったるい声！！いつから覚えたの！？」

ちょうど快斗に回し蹴りを行っていたところだった。

だが快斗は男で蘭は女。

さすがの蘭の蹴りも運動神経抜群の快斗にはなんなくと避けられてしまう。

「悪い悪い。いつもの癖、まぁ女子にだけだけど・・・。」

「・・・まったく。快斗も快斗なんだから！」

「へ？」

「何でもないわよ！」

蘭はプンプン怒って快斗に背を向けていた。

どうやらヤキモチをやいているらしい・・・。

快斗は「ハイハイ。」と分かった感じで椅子から立ち上がると、蘭が向いているほうへと歩いていった。

「申し訳ございませんでした、姫。今後このような事がないように・・・。」

「はいはい！いつものお決まりの言葉でしょ！？」

立て膝をして、蘭の手をとっていた快斗にむかって蘭は冷たく言い放った。

後ろで喋りながら走り回っていた男子たちは、この光景を見て、

「あーあ、また始まったよ。ここで工藤が来たらヤベェと思わねぇ？フツー・・。」

「ああ。だって今日、あいつ久々にくるらしいしな・・。」

「あいつ、毛利の事スッゲェ好きだったからな～マジで絶句すると

思う。」
「っていうか死――」
といいかけたその時、
ガラッ
「おっす！」
『工藤新一』が現れた。
し・・ん・・
教室全体が静まり返ってしまった。
「へ？」
（・・ガクッ・・・・）
新一は普通に入って普通にあいさつをしたのに静まり返ったのでガクッときてしまった。

「お、おう！工藤。久しぶりだな！」
男子達は真っ青になりながらもあいさつをした。
するとだんだん教室にもざわめきが戻り始めていた。
「ああ、結構休んでたからなー。・・・ってそれよりさっきなんで静まり返った？」
「い、いやぁ！何でもねぇよ！！久しぶりに来たからビビっただけだ。」
「本当か？」
「あ、ああ！本当だとも、名探偵！」
さっきよりもさらに真っ青になりながら言う。

（何だ？こいつら・・・・・・ったく朝の蘭といい、こいつらといい・・・・）
新一がジロ目で見たので男子達は余計ひいた。
（あっそうだ。蘭はどこだっけ？）
「おい、蘭どこにいるかしらねえか？」
『えっ！？』
男子達は声を合わせてさらに余計にひいた。
新一は気にもせず教室をぐるっと見回して「蘭どこだぁ？」と言った。
一方、男子達は、
《やめて下サイ・・・っつーか工藤、俺達の事も気ぃーつかえ！》
と心の中で叫んでいたが新一には知らずにずっと見回している。

「あっ・・・・！」
新一は一声言ったが、そのまま呆然とたちすくんでしまった。
「うわぁ・・・。復帰早々かわいそうな奴・・ついにバレたか。」
男子達はそう言って新一を慰めようとしたが新一には目の前の光景しかみえなかった。

「なによもぅ、快斗ったら・・。」
「んだよ、別に何も悪い事してねぇじゃねーか。」
目の前には、蘭と快斗が一緒に楽しく話をしていた

そう、かつて蘭と新一がそうしていたように・・・・

へ・・・・・・？

目の前の思わぬ光景に口がポカンと開いてしまった。
（・・・お、おいおい何で蘭が・・・それに誰だよこいつ！）
「く、工藤。おちつけ、おちつけってば・・・・！」

新一は我に返って見るといつの間にか側に居た男子の襟首をつかんでいた。
「お？・・・悪ぃ悪ぃ・・つい、ね。」
「つい、ね。・・・じゃねえだろーが！お前、歯軋りさせて今にも俺の事殴り飛ばしそうな顔してたぞ？」
やられていた相手は襟首を離してもらってホッと息をつきながら言った。
だが新一はそんな言葉も耳に入っていない。
蘭の側に居る男子を指指して聞いた。
「おい、それよりあいつだれだよ？見かけねー顔だな・・・。」
「それよりって、まぁ良いけど・・・あぁあいつか？毛利・・・の所にいる奴。」
「・・？おい、お前ら何か隠してねーか？さっきから俺が蘭の方見てるとヒヤヒヤしてるみてーだが。」
（『さすが名探偵・・・』）
新一が不審な目をして言ってくるので男子達は引きつり、複雑な笑顔をしながら心の中で思っていた。
「ん～～～～？」
「そ、そんなワケねーだろが！なぁ！？」

『ああ・・・。』
「そぉか？」
『ああ・・・。』
男子達はしどろもどろになりながらもできるだけ笑顔の顔をつくった。

「フ、ン。・・・・まぁいいか。蘭に聞けばいいことだしな。」
「ああ。それがいい。・・・・ってえぇ！？」
「んじゃぁな。」
『お、おい待て工藤。行くなぁ～！！』
男子達は声を揃えて言ったがもう、新一は蘭の側にいってしまった。
男子達は逃げるように女子達のいる、後ろに避難した。
「おいおい、マジで今度こそヤバイぜ。」
「ああ。もう・・・今度こそ死ぬな・・。」
逃げるように後ろに行ってヒソヒソと新一の様子を窺っていた。

一方、新一はそんな事とも知らず、「ちょっと気にかかるがまぁいいか」とでも言うような顔をしながら蘭に話し掛けようとしたが・・・

「よぉ、蘭！」

「うん、それでね～園子ったらさぁ・・。」
「クククッへぇ～あいつもそんなことも言うんだな～。」
「ねっ面白いでしょ？」
「あぁ笑えるっ」
『アハハハ！』
蘭と快斗は新一の声なんて全然耳に入らないらしくずっと新一を無視したまま、自分達のおしゃべりに夢中になっていた。
（んだ、こいつら！！それより誰なんだよこいつは・・・・！）

バーン!!!

新一はついにキレてしまい机を思いっきり叩いてしまった。
「キャッ!」
「だ、大丈夫か蘭!・・・おい何すんだよ、てめぇいきなり・・・・!」
快斗と蘭はその音でやっと新一の存在に気づいた。
快斗はいきなり机を叩かれて、しかも蘭が悲鳴をあげたので驚いて怒鳴ってしまった。
新一はその言葉に余計キレてしまった。

「・・・ほぉ?愛想良くあいさつをしたのに、シカトをして二人でペチャクチャ話し、気が付くように机をたたいてやったら・・・その態度ですか・・。」
(おらおら。早く返事を返しやがれ・・・。こっちには言いたい事と聞きたい事が山ほどあるんだよ!!)
新一は腕組をしていっそう怖そうな顔をしながら言った。
「あ・・・これはこれは、失礼致しました。そうとも知らず・・・。」
快斗はのったりのったりと話すので新一がギロリと睨みつけた。
睨みつけた新一は快斗をよけて再び蘭の所へと向かった。

「よ・ぉ・蘭。それよりさっきは何で学校行く時おいてくんだ――」
「お・は・よ・う・し・ん・い・ち!!」

バシッ!!

「よっっ!?」
「快斗〜ごめんねっ」
蘭はそう言って快斗の方へと走っていってしまった。

「お、おい蘭！」
「まったく、新一の馬鹿！あ、アイツ『工藤新一』って言って私の幼馴染。快斗知らなかったよね？」
「あ、いや。新聞とかでよく見たことあるから・・・知ってた。けど、蘭の幼馴染だったとはなぁ～」
また二人だけの会話になっていきそうだった。
「ゲホッガホッ！」
新一はむせながら苦しそうに腹をおさえていた。
「あ、新一もごめん！大丈夫？快斗のこと睨むからだよ！」
（お前なぁ・・・電柱を割るぐらいの怪力女にやられたら普通じゃ立ってられねーぞ！？）
「あ、新一も快斗の事知らないよね。半年ぐらい前に転校して来た『黒羽快斗』！私の彼氏だから。仲良くしてあげてよね！」
蘭は少し顔を赤くしながら小さな声で言った。

（え？・・・・・・ら、蘭・・・今なんて？）

蘭は快斗と廊下へと歩いて行ってしまう。
取り残された新一は腹をおさえながら、行ってしまった廊下をずっと見つめていた。

第五部　『驚愕な事実』（後書き）

＃作者より＃

こんにちは、亜純玲（アズミレイ）です＾＾

「あいつは誰にも渡さない。第五部『事実』」を読んで頂きまして、ありがとうございます！

今回は・・・新一君が殆ど唖然呆然状態でした。

まぁこれでお話が終わりになっちゃつまんない！（不明）あまりよく言えませんが、これからの続きにご期待をば・・・！

よ、宜しくお願いいたします＾＾

最後に、今回の小説評価・感想・アドバイス等宜しくお願いいたします。

第六部　『転校生』

（おいおい。マジかよ・・・。ウソだろ？なぁ・・・・蘭）

新一は呆然と蘭たちが去っていった廊下を見つめていた。

「あっちゃ～・・・。毛利もよくフツーに言えるよな。」

「ああ、まったくだぜ。」

「工藤君かわいそう～。」

「本当っ。あたし泣きたくなってきた・・。」

ザワめきの中からこんな声があちらこちらに聞こえてきた。

新一は我に返って聞こえないフリをしながら自分の席に座ろうとした。

席は・・・・蘭の後ろだ。

（蘭の隣は・・・・っと・・・・・・・！？）

見ると蘭の隣の席には『黒羽快斗』とシールが貼られていた。

次から次へと色んな気持ちが込みあがってくる。

ガラッ

後ろのドアから蘭と快斗が入ってきた。

相変わらず楽しそうに話している。

すると、

ガラッ

前のドアが開いて担任の教師が入ってきた。

「よし、皆来てるな～？今日は転校生が来たので紹介する。席につけー。」

「えっ？転校生、めっずらし！」
「女の子かな？男の子だと思う？」
「はやく見てみたい！」
「友達になれるかな～？」
ザワザワと移動しながら皆、席についた。
「皆席についたな・・。それでは紹介する。入りなさい。」

ガラッ

「うっわ、かわいい！！」
「美人～～～っ！」
一瞬にして志保は注目の的となった。
だが、相変わらず志保は冷静で顔色一つ変えない。
（ハハハ・・相変わらずだぜ。志保）
新一は心の中で半分呆れ半分感心した顔をしながら思った。
「それじゃ、自己紹介・・。」
クラス全体がし・・んと静まりかえった。
「初めまして。宮野志保と言います。趣味は色々。特技は科学に関して何でもです。工藤君の隣の家にすんでいるのでこれからよろしく。」
し・・んと静まりかえる中志保は冷静に自己紹介をすませた。
「そんなら席は工藤の隣でいいか？」
「ええ、そのつもりだったから・・・。」
『えぇ～～～～～～ッ！？』
（ハハハ・・・・。）
驚きの発言にまたクラス全体が声を上げる。
しかし志保は澄ました顔で何事も無かったように呆れ返った新一の隣の席に座った。
「それじゃ、よろしく工藤君？」
「ハイハイ・・・。」

「志保さんよろしくね？」
「これからよろしく宮野さん。俺、黒羽快斗。呼び方はなんでもいいよ～」
「あら、蘭さん・・・と、黒羽君？よろしくね。」
ウィンクを投げた快斗だが志保にあっさりとかわされた。

（ふぅ、これから大変そうに成りそうね・・工藤君。でもあなたにならできるわ・・。）
新一は目の前で仲良く話している蘭と快斗に睨みをぶつけていた。
それを横目で見ていた志保は大体見当がついたのだろう。
心の中で強く、そう思っていた。

第六部　『転校生』（後書き）

＃作者より＃
こんにちは、亜純玲（アズミレイ）ですー＾＾
「あいつは誰にも渡さない。第六部『転校生』」を読んで頂きありがとうございます。
今回はかなり短かった・・です；
何故かと言うとこの回で一応一まとまりなので；；；
次からどんどん変化していくのでお楽しみをw

これからも宜しくお願いします！
評価・感想・アドバイス等も宜しくお願いいたします＾＾

第七部　『幼馴染』

「・・・あぁ～もうダメだ！耐え切れない！！・・・なぁ黒羽の事一発ぐらいぶっ飛ばしてやっても構わねぇよな？志保・・。」

――あれから一ヶ月がたった。

蘭は新一の気持ちを知りもしないで快斗とイチャついている。

今は昼休み・・・新一は志保と一緒に屋上で相談に乗ってもらっていたのだ。

「ダメよ。そんな事したら余計に貴方が彼女に嫌われるだけよ？・・・そんなに耐え切れないのなら、思い切って自分の気持ちを蘭さんにぶつけてみれば？」

「！！だめだ、できない・・・・っ、くっそ～！そんな事・・。」

（そんな事・・・今、幸せそうなあいつらに言えるわけ・・）

新一は頭をガリガリかきむしりながらそう思った。

その時、

バンッッ！

いきなり屋上のドアが開いた。

「はぁ・・・・つくづくかわいそうな人ね・・新一君？」

驚いて振り返るとそこには蘭の親友、園子が立っていた。

「園子・・・お前も知ってたのか？」

「あったりまえでしょ？あんなにイチャイチャしてたのに・・・。今なんて・・こうだもんね。」

園子は呆れた顔をしていった。

「・・・・ねぇ、蘭さんっていつから黒羽君と付き合ってるのかしら？」

そこまで、口を出さなかった志保が言った。
「ん？・・あぁ、あれはね。何かいつのまにかああなってたらしいんだ～・・・。」
「・・・へ？」
新一はポカンと口を開けた。
「新一君。快斗君が転校してきたのは知ってるよね？」
「あ？ああ。」
「・・・でも何でああなったかは私もよくわかんないんだ・・・。」
しばらく沈黙が続いた。

「・・・そういうことね。なんとなく分かったわ・・・。」
『え！？』
二人ともビックリして言った。
「鈴木さん、ちょっといいかしら？」
「え？う、うん。」
志保はいきなり園子を呼び出すと、屋上への階段を下りていって、新一に聞こえないぐらいのところまで来ると足を止めた。
「あのね・・蘭さんは初め工藤君が好きだったでしょ？彼女、よく工藤君を想って泣いてたそうじゃない・・。そこで黒羽君が転校してきた。彼女は性格、声、顔まで瓜二つの彼に工藤君と重ねてしまって、好きになってしまったんじゃないかと私は思うの・・・。」
「・・・・確かに・・私もそう思う。」
そこまで真剣に聞いていた園子は言った。
「わ、私その事新一君に知らせてくる！！」
「待って！」
ダッと走り出そうとした瞬間、園子は志保に腕をつかまれた。
「な、何で・・？新一君にこの事を知らせておいた方が・・・絶対、楽なはず・・！？」

ビックリして振り返った園子は志保の顔を見て言葉を失った。
志保の目からは、涙がこぼれていたのだ・・・。
「ダ、ダメ。この事は絶対に工藤君には言わないで・・・！彼は、自分でそのことを突き止め彼女を取り戻してから彼女の口から真実を聞く権利があるのよ・・。私たちが言ってはいけない。彼は、彼女の口から本当の言葉をもらうの・・・。」
「・・・・志保さん・・・。」
（あぁ、志保さん・・・・あなたも新一君の事を愛してたのね・・・。その気持ちが痛いほど伝わってくる・・）
園子は悲しい笑みを浮かべて志保の頭をそっと撫でた。
「うっ・・・・・く・・・・。」
（・・・・志保さん）
「・・・志保さん。私、蘭に新一君と快斗君の事どう思ってるのか聞いてくる。」
「え・・・？ちょ、ちょっと鈴木さん！？」

ダッッ

志保がそう言いかけた時にはもう遅かった。
園子は走って昇降口の方へと走っていってしまった。
「鈴木さん・・・。」
（志保さん、待ってて！私が、私が真実を確かめてきてあげるからっ）
園子は走りながらそう思った。

＊＊＊＊＊＊

「らーん！！」

「ん？」
その声に蘭と快斗が振り向いた。
今は部活も終わって二人は一緒に帰るところだったらしい。
「ど、どうしたの？園子。」
「何？どうした？」
「ハァ・・ハァ！快斗君、ゴメン。ちょっと席はずしてもらえる？」
「え？あ、ああ。」
「ごめん快斗！すぐ終わらすから先に帰ってて！ってちょっと、何よー園子～？」
単刀直入に言われたので快斗も少し戸惑った。
だが、問答無用といった感じで園子はかまわずぐいぐいと蘭の腕を引っ張っていった。
蘭は園子が返事も返してくれないので呆れた声で言った。
「？どうしたの、園子。何か困った事でもあったの？今日は快斗の誕生日だからできるだけ早く用事は済ませたいんだけど・・・。」

ピクッ

「快斗君の？」
「うん！この前、新一に手伝ってもらってプレゼント買ったんだよ？私、男子が好きなものって全然分かんなかったから、新一と一緒に快斗が好きそうな物一緒に探したんだぁ、って言ってなかったっけ？」
蘭が幸せそうな顔をして言った。
（新一君が・・・。そんな事一言も聞いてない。・・新一君、辛かったよね、なのに頑張って蘭のために探してあげたんだ。快斗君のプレゼント・・）
しばらくの沈黙が続いていた。
「ね、ねぇ園子ー？どうしたの、あ、まさか何か怒ってる？って・・・えぇ！？」

蘭が戸惑った様子で園子の顔を見たとき、驚いだ。
園子は絶えられなくなって涙が零れ落ちてしまったのだ。
「どうしたの園子！？」
蘭がおどおどしながら聞いた。
「ねぇ何か・・・。」
「ねぇ蘭。私達って親友だよね？」

「え？」
急に聞かれた蘭は驚きの表情を見せた。
「何言ってるのよ！あたりまえでしょ！？」
「そう、ありがと。・・・それじゃあ・・・・新一君は？」
「新一・・・？」
「あ、あいつはただの幼馴染よ・・・。」
その時、蘭が少し暗い表情を浮かべているのを園子は見逃さなかった。
「じゃあ快斗君は？」
「かいと？あいつは私の彼・・彼氏だよ！！」
「本当に？」
「本当だよ！」
「ふぅ～ん・・・。」
（蘭・・・・・・。あなた、新一君の気持ちが・・分からないの！？）
そう思いながら園子は言った。
蘭は早く逃げ出したそうな顔をしていた。
また、少しの間沈黙が続いた。
そして園子が自分の思いをいっきにぶちまけてしまった。
「蘭・・・新一君の気持ち分かってるの！？」
「し、新一の気持ち？そ、そんなの知るわけないじゃない！」
「あんたねぇ、それでも新一君の幼馴染！？」
「な・・・っ！？」

蘭は黙ってしまった。
園子の目には涙が溢れ出している。
（た、確かに快斗のプレゼント選んでくれてる時はずっと寂しそうな顔してた・・。いっつもハイテンションで意地悪な奴だったのに・・・・。）
「し、新一君と一緒に快斗君のプレゼントを選んでる時とても悲しそうだったでしょ？」
「え・・・・？」
園子の言葉に蘭は驚いてしまった。
自分の心を見透かされているように園子の瞳はまっすぐ蘭を捕らえていた。
「その顔はそうらしいわね。それじゃ、私が言えることは一つだけ・・・・。快斗君と新一君を重ね合わせないで！・・・蘭が苦しかった事は知ってたよ、気持ちが抑えられない事も・・・私には、分からないけど・・・・でも！いつの間にか、知らないうちに人を傷つけてる事って・・・あるんだよ？」

バタバタッ

園子はその言葉を言い残すと一目散に駆け出してしまった。
蘭はそこでずっと立っていた。
園子のその言葉が、何度も繰り返して耳に痛く鳴り響いていた。

――いつの間にか人を傷つけてるって事・・・あるんだよ？

第七部　『幼馴染』（後書き）

＃作者より＃
どうも、この頃「タッチ」に再び目覚めた亜純玲（アズミレイ）ですー＾＾
「あいつは誰にも渡さない。第七部『幼馴染』」を読んで頂きまして・・誠にありがとうございましたw
今回から「幼馴染」だの「友達」など「親友」だの・・・色々変化していくので、宜しくお願いします＾＾
今後とも小説評価・感想・アドバイス等・・どうぞ宜しくお願いします！！！

匿名様＞小説評価・感想ありがとうございます＾＾
　あ、前よりも良くなっていますか！？
　嬉しいですーwありがとうございました＾＾　　今後とも応援宜しくお願いします！

第八部　『友達とか。』

「いつの間にか、知らないうちに人を傷つけてるって事・・・あるんだよ。」

分かってる

分かってるよ・・・・園子。

＊＊＊＊＊＊

ガタッ

「？・・鈴木さん・・。」

顔を上げると目の前には園子が哀しげな顔で見下ろしていた。

「言いたい事はすべて言った、つもり・・・・。」

「・・・そう。」

ふぅと息をつきながら志保が言った。

（あとは、蘭さんがどう受け止めるか・・・ね。）

「・・・・もう空が暗いわね。帰りましょ？」

「うん。」

もうほとんど太陽が沈み、暗くなった空を見ながら二人は外に出た。

いつもよりも倍に重くなった心と足取りで二人は歩いていた。

・・・と、その時パッと顔を上げた園子が言った。

「あ・・・・・蘭だ。」
「え・・・。」
園子の言葉にパッと顔を上げた志保は園子の目線を追った。
蘭は、自分の足元をみながら苦しそうな顔をしている。
「あ・・・・・・！」
志保が声を上げた。
蘭が、学校の方へと歩き出したのだ。
「ちょ、ちょっと蘭さんどこへ行く気？・・・ま、まさか屋上から飛びおりたり！？」
「志保さん落ち着いて！！大丈夫よ、蘭はそんなに弱くない。確かに傷ついちゃってるかもしれないけど。」
「じゃあどうして・・・！？」
びっくりした志保は余計落ち着けなかったが、園子はクスッっと笑って言った。
「そりゃあ・・・親友だからね。蘭の事なら分かるのよ。それに、蘭が屋上へ行く時はいつも悩み事があったりする時に、考えたりする所だから・・・。」
園子が屋上を見ながら言った。
「親友・・・・か。」

しばらくの沈黙が続いた後、志保がぽそっと呟いた。
「私には、親友も友達も・・・いなかったっけ・・・。」
志保はもうすっかり暗くなった空に向かって哀しそうな半ばさびしそうな顔をしている。
「え・・・・？」
「あ・・独り言よ、気にしないで・・・！」
驚いている園子に向かってパッと明るい顔にもどしながら志保が言ったが、やはり少し辛そうな顔をしていた。
「・・ゴメンなさいね。・・さっ、こんな話はやめにしてさっさと帰りましょ！」

タッっと志保は歩き出した。
（でも・・・ちょっと欲しかったかな・・『親友』とか・・）
その時園子が急に立ち止まった。
それにつられて志保も立ち止まった。
「鈴木・・・さん？」

「・・・志保さん。あなた・・・自分に友達とか親友とかいないと思ってるみたいだけどっ私たちは全員あなたの友達だよ！！」
「・・・え・・？」
（今・・・何て・・・・？）

「それに・・・・私はあなたの『親友』になりたいと、思ってるよ・・・？」
「！？」
志保は驚きのあまり、声が出なかった。

（喉・・が焼けるように熱い・・何で――・・？）
ポロッ

なみだ・・・・・・・・・・・・・・？

「しーほーさんっ！」
園子が手を差し伸べていた。
にっこりと笑いかけてくれている。

「鈴木・・・さん・・。」
志保もにっこりと笑い返した。
そして手を差し伸べた。

「ありが・・・と・・・う。」

そして二人は手をつなぎながら歩き始めた。

第八部　『友達とか。』（後書き）

#作者より#
こんにちは、亜純玲（アズミレイ）ですー＾＾
「あいつは誰にも渡さない。第八部『友達とか。』」
を読んで頂きありがとうございますw
今回は主に志保ちゃんと園子ちゃんのやり取りだった様で・・・・
＾＾；
苦手な方はすみません；；
でも読んで下さってありがとうございますww
あー・・・特に書く事が、ありません；（死）
んー・・・・あ、「タッチ」全巻揃えましたw（殴）
面白いですよねっ！ど、同士とか居てくださったらな～なんて・・・
思ってますので、いらしたりしたらメールなんぞを下さい＾＾

最後に、小説評価・感想・アドバイス等よろしくお願いいたします
＾＾

第九部　『行くあて・・・』

「・・・・はぁ～・・・・。」

コツッコツッ

蘭は屋上へと続く階段を登っていた。
辺りはほとんど透き通った藍色に変わっていたが、気にしない。
（新一の気持ち何て分かるわけないじゃない。・・・私の気持ちもわかんないでずっと待たせてる奴のことなんて・・・分かりたくもないよ・・）

ガチャ
「っくっそぉ。宮野と園子の奴～・・・っ。」
屋上のドアを開けたとたん誰かの声が聞こえたので蘭はギクッとした。
誰かと思ってそーっと見てみると新一が頭をかきむしりながらあぐらをかいて座っていた。
（し・・新一！？）

「・・・・・ら・・ん。」
（え・・・気づかれてた・・・・！？）
急に新一の顔が真っ暗になったと思うとそんな言葉が出てきたので蘭はまたもや驚いた。
「・・・っなんでだよ蘭。・・・なんで黒羽なんかと・・・。俺もちゃんと蘭の事考えてやってるのに。」
（へ？快斗・・・・？え、考えてるって、何を？）
新一の言動に？（はてな）が続いた。

「・・・・・だったのに・・・・。」
新一は顔に手を当ててポソッと呟いた。
（え・・何？聞こえない――）
蘭は聞こえにくく耳を済ませた。

「・・ずっと・・・好きだったのによぉ！！！！！」

（・・・・・・え？・・・・・・・・・・・・・・）

バンッ

蘭はいきなりの言葉に呆気にとられてドアを開けてしまった。

ビクッ
ビックリしたのだろう。
新一の顔が勢いよくドアの方へ顔を向けられた。
「蘭！？」
「し・・・・新一・・・・？」

（・・・・聞いてたのかよ・・・・・・・・・）
しばらくの沈黙が続いていた。
すると、
「・・・・どこら辺から聞いてた？」
新一が下を向いたまま言った。
「え？・・・・と、『っくっそぉ。宮野と園子の奴～』・・って所から・・・。」
「はぁ～・・・・んじゃほとんど全部じゃねぇかよ。」
ため息をつきながら半ば呆れた笑みを浮かべながら新一は言った。
「・・・聞かれたんならしょーがねぇーよな。まぁ、そう言う事で俺がずっとお前の事好きだったのは、本当だから。でも、お前には黒羽が居るし、もう遅いけど・・・ずっと待たせてたのも・・・俺。だしな。」

「ホント、こりろよ俺も。」
「・・・・・え？っちが！私は新一の事がずっと――・・・！？」
（へ・・・？私、今なんて言おうとした・・？）
蘭は自分が言おうとした事が理解できなかった。

「・・・ごめんな、蘭。」
「・・・あっ。」

ガチャン
蘭は手を伸ばしたが新一には届かなかった。
新一はふと悲しそうな笑みを浮かべて去っていった。
蘭は自分の出た手を見つめた。

――・・・・・え？っちが！私は新一の事がずっと――・・！？

自分の言った言葉が頭の中でぐるぐる回っている。
自分の手を見るめる。
新一の顔、後ろ姿、寂しそうな背中・・快斗、園子、志保・・・・・・
するとハッと思いつく事があった。

（私・・・・・・こんなにも、まだ・・・・・・・・・・・・・・）
いつの間にか蘭は駆け出していた。

（こんなにも、まだ・・・・・・・・・・・・新一の事が・・・・・）

行くあてはよく分からない。
でも・・・体が動いてくれている。
風が行く手を教えてくれる。
確信は、できないけど・・・たぶん、そこは――・・・・・・

第九部　『行くあて・・・』（後書き）

#作者より#
どうも、少しお久しぶりの亜純玲（アズミレイ）です^^
えっと、新一君…ヒトリゴト激しいですねw；
そこが書いていて一番突っ込みたくなりました。
ちょっと今忙しいので、今回はこれまでで・・・

それでは、次話をお楽しみください！
感想・評価・アドバイス等待ってますので宜しくお願いいたしますっっ

第十部　『Ａｎｇｅｌ』

コツ　コツッ

「・・・・・あれから蘭さんたちどうなったかしら・・・。」
志保が急に立ち止まった。
つられて園子も足を止めた。

「・・ん～・・・・まぁどうだろうね。ここからはあたし達が入る場じゃないし・・。
まぁそれよりもっ！よくここまでシナリオどーりに動いてくれたわよねー。ねっ志保♪」
にんまりと笑って園子がこっちを向いてきた。
「クスッ・・・そうね、まぁよくあの三人を見てれば分かるものよ。可哀相ね。あの恋愛勘０の子供達・・。」
『プッ・・・・アハハハハ！！！』
とまどいもせずに志保と園子は夕暮れの道の中を笑いながら歩いた。
通りすがりの人達もクスッと微笑んでこっちを向いている。
（・・・・久しぶりにこんなに純粋な声で笑えたかもしれない。）
志保は笑いながらそう思った。

「あ・・・・・そろそろここまでいいよ。もう暗いし遅いし・・・。そっれに、ただでさえ美人さんの志保と歩いてちゃぁこっちがブッサイクに見られちゃう！いーっだ。」
べーっと舌を出して園子が無邪気に笑った。
クスクスと志保も笑っている。

「・・・それじゃ、また明日学校で。」
「うんっ。バイバーイ♪」
二人とも手を振って歩き出した。

志保はすがすがしい気持ちで微笑んでいる。
あの暗く恐ろしい組織にいる頃とは別人のようなさわやかな笑みだ。

『逃げんなよ灰原、自分の運命から逃げんじゃねーぞ！！』

ふいに昔のコナンの声が志保の頭によぎってきた。
（・・・・そうね。私もあなたのように運命から逃げなくてよかったわ。だって・・・・）
クルッともと来た道を振り返った。
すると園子がピョンピョン跳ねながらまだ大きく両手で手を振っていた。
志保は微妙に赤い顔になったが、にっこり笑って手を振りかえした。
（・・・・だってこんなにすばらしい『親友』ができたのだから・・・。今度工藤君に言うわ。自分の口から・・・）

『ありがと』・・・・・・・・・・・・・・・って。

すがすがしい気持ちで歩いていると、まだ園子が叫んでいる声が聞こえた。
「志保ーーーー！！気をつけて帰りなよぉ！！ナンパされたら叫びなー！！！あたしが蘭連れてきてボッコボコにしてあげるからーー！！！」
手をグルングルン振り回して園子が叫んでいる。
今度こそ志保は顔を１００％真っ赤にした。

「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．　Ａｎｇｅｌ．」

ぽそっと志保が言った。
その言葉が聞こえたのだろうか、園子も「こちらこそ！」と言って元気良く歩いていった。

（こちらこそ！って・・・・・まったく。私が言いたかったのは――）

――・・・　Ｙｏｕ　ａｒｅ　Ａｎｇｅｌ！！！

第十部　『Ａｎｇｅｌ』（後書き）

＃作者より＃
こんにちはｗ
眠くてしょうがない亜純玲（アズミレイ）です＾＾
「あいつは誰にも渡さない。第十部『Ａｎｇｅｌ』」を読んで下さり、誠にありがとうございますｗ
ちょっと短かったんですが、ここの会話とかは何となく好きです＾＾
意味ありげな言葉も含まれていましたが・・気づかれたでしょうか？？頑張って理解してください＾＾；
それでは、小説評価・感想・アドバイス等よろしくお願いいたしますっ

第十一部　『気持ちの問題』

ＰＰＰＰＰＰＰＰ―・・・・・！
（ん？・・・メール・・・・って蘭！？）

【さっきはごめんなさい。
その事について話がしたいので、学校の側の公園に来てください！
蘭】
「・・・・・・あー・・・・これから俺は殺されるって心に決めといた方が良いんすか、ね。」
新一は苦笑いしながら、もと来た道を引き返していった。

＊＊＊＊＊＊

「・・・・俺って結局、何なんだろ。・・・・やっぱまだ引きずってんのかな。」

ＰＰＰＰＰＰＰＰ―・・・・・！
（お、蘭からメール・・・・・でも・・・・・）
「まぁ、公園・・・・か。・・・ちょっくら行ってきますか。」
頭の中のモヤモヤが消えないまま、快斗は階段を下りて玄関のドアを開けた。
「母さーん、ちょっとそこの公園行ってくる！」
「ちゃんと帰ってきなさいよ！」
「ハーイ。いってきますー。」
ガチャン

「はぁー。」
ドアを閉めると何故かため息が出た。
そして、少し暗くなった空を見上げると「はぁ。」とまた一つため息がこぼれた。

――・・・一方、公園では

（皆に悪い事しちゃったからな・・・・・来てくれるかな。）
もう外はすっかり夜の深い闇に包まれていた。
さすがにもう遊んでいる子供達はいなくなり、道の周りは電灯の光で明るく照らされていた。そこに蘭は一人で小さな公園にポツンと立っていた。
（私が気持ちを、言葉をはっきり言えば良かったんだ。新一の事も悪かったな・・）

「よぉ、こんな時間にどうしたんだ？」
「！？」
びっくりしてふり返ると快斗が立っていた。
「あ、快斗・・・あのね、話があって・・・。」
「ああ、丁度良かった。俺も話があんだ。でも・・・蘭、先に言って。」
真剣な眼差しが蘭の心に響いた。
目をそらしそうになったが、すぅっと深呼吸をして蘭は話し始めた。
「・・・・あの、ね私、快斗の事大好きだよ。」
「うん。」
「でも、それは新一に似てるから・・・新一に会いたい気持ちが、

丁度そっくりだった快斗にうつちゃったのかなって・・・思い始めた。」
泣きそうだったが蘭は快斗をまっすぐ見た。
快斗もまっすぐ見返してくる。
少しの間沈黙が続いた。
風が吹いて寒かったが二人は身動き一つ立てなかった。

（ちゃんと、自分の気持ちをしっかり持たなきゃ。今まで自分と皆を騙してたんだから・・。今、ここで言わなきゃ・・・）
もう一度大きく蘭は深呼吸した。
そして、

「・・・だから、ごめんなさい。今まで。」
頭を深く下げて今までためて来た心の奥にあった本当の気持ちを出した。

すると、
「はぁ～、困ったねどうも。同じ事をいきなり言われたら俺、何て言えば良いんだか・・。」
「へ？」
ビックリして顔を上げると快斗が困った顔をして笑って言った。
「同じ事って？」
「んー？あぁ、実はさ前の学校に蘭とそっくりな女が居たわけ。まぁ、蘭より子供なんだけどな。青子って奴。」
すぐそこにあったベンチに腰をかけながら話し始めた。
「好きで好きでしょうがなかったんだけど、学校変わっちまったから会えないし。そしたら蘭に会って・・・・。ま、あとはそっちと同じ。うつっちゃったのかな？」
快斗はちらっと側の草木の方を見た。

「月・・・・綺麗だな。」
急に真っ暗な空を見上げながら快斗が言った。
「・・・うん・・。」
蘭もつられて空を見上げながら言った。

ガサッ
「お話は終わりましたか？」
「！？」
ふいに音がしたと思うと新一が草木の中から出てきた。
髪などには葉がついていて、随分前から隠れていたように思われる。
「し、新一？！いつからいたの？」
「黒羽が来るちょっと前から・・。」
蘭がびっくりした困ったような顔をしながら聞くと、むすっとしながら新一が答えた。
「ありゃ・・・それじゃ、俺達の気持ちは分かったよな。」
「・・・・・ああ。てか、お前気づいてただろ。」
一瞬間を置いてから新一が言った。
「まぁまぁ♪・・・・それじゃ、俺はこれで帰っから。」
「あ、快斗っ、・・今までありがとね！」
快斗がスタスタと蘭の前を歩いていった。
蘭の目の前まで歩くと急に立ち止まり手をとってキスをした。
「く、く・・・・・！？」
「これはいつも睨みつけてきた探偵クンに、し・か・え・し♪」
今にもキレそうな新一に生意気そうな笑顔で快斗は笑った。

蘭は頭が混乱していて何が何だかわからない状態だ。
「じゃあな、蘭。・・・それでは！また明日学校でお会いしましょう♪」
パチンッ
指で合図をすると快斗は跡形もなく消えていた。

「ちっくしょうあんのヤロォ・・・っと蘭大丈夫か？」
蘭は腰が抜けてぺたんと座っていた。
「蘭？」
「あ、あのね新一・・・今までごめん、ね・・？」
「へ？何いってんだ？何か謝れるような事されたっけ、俺。」
新一は分からないと言うような顔をしてウソを付いた。

（・・・バカ。ウソつくの一番苦手なくせに・・）

「ありがと・・・。」

第十一部　『気持ちの問題』（後書き）

＃作者より＃
こんにちは、亜純玲（アズミレイ）です＾＾
「あいつは誰にも渡さない。第十一部『気持ちの問題』」を読んでいただき、ありがとうございますw
あの・・・あまり蘭を悪役にしているつもりでは無いのですが、悪役にしてるように見えるんですかね；
前のサイトで連載してた時によくその様なことが感想でありました。
ウム・・・。
私も色々と勉強が必要だなーって改めて思いやられました＾＾

それでは次回、最終回w
ですので皆様どうぞ最後まで宜しくお願いいたします＾＾

第十二部　『あいつは誰にも渡さない。』

「へぇ！？あんた新一君とくっついたんだぁ～！」
昨日の夜、公園であった事を屋上で新一と蘭、園子、快斗、志保が話していた時、急に園子が大声を上げた。

「くっついたって・・・・ちょっと園子！」
蘭が赤面になりながら園子に言った。
「あら、やっぱり工藤君は蘭さんの事が諦められなかったのね。」
「うっせーよ。」
こっちも新一が赤面しながら志保に言っている。

「そうそう、俺が入る間なんてなかったーみたいな？まぁどっちにしろ俺はあいつだけどー・・・。」
「え？やっぱりそうだったのね、蘭！」
「違うってばっ！」

「クスっ・・。」
志保は冷やかしあってる蘭達を見て微笑んでいた。
空は真っ青というほど真っ青で、そこに浮かんでいる雲が白くとても輝いて見える。

「何笑ってんだよ、宮野。」
新一がむすっと志保を睨みつけながら言った。

「別にー・・・。」
空を見上げながら志保は言った。
「お前、前より表情が柔らかくなったよな。明るくなったっつーか・・。」
志保の表情に気づいた新一が言った。
「・・そうね、園子達のおかげよ。」
にっこり笑って言った。
新一も笑っている。

「また、蘭さんを誰かに捕られたら・・・どうするの？」
するといきなり、新一に顔を向けながら志保は言った。

「・・・・バーロ、あいつは誰にも渡さねーよ。たとえ俺の命に関わったとしてもな。」
新一はからかわれている蘭のほうを見ながら言った。
すると、
「あ、そうそう。工藤ちゃん、しつこい男は嫌われるって・・・知ってた？！」
いきなり快斗が振り返って、新一に言った。
「・・・っ黒羽ぇ・・？お前、まじうざい。」
ピシッと新一の頭の血管が見えた気がする。

『プッ・・・アッハハハハハッ！！』

――・・・皆、笑った。

ここからが、僕等の一歩。
はじめのページ。
これから先に、なにがあるかわ分からない。けど、
この笑顔があれば・・・のり越えてゆける気がする。

第十二部　『あいつは誰にも渡さない。』（後書き）

＃作者より＃

こんにちは、お久しぶりの亜純玲（アズミレイ）です＾＾

はい、完結致しましたっ

今までお付き合いいただいてどうもありがとうございました＾＾

・・・小説評価・感想は常時募集中です＾＾；

宜しくお願いします。

次回作は前のサイトで連載中だった「君ノ為ニ僕ハユクヨ」の続きですー。

こちらもどうぞ宜しくお願いいたします＾＾

今まで読んでくださっていた方々、どうもありがとうございました！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4747a/

あいつは誰にも渡さない。

2010年11月12日20時10分発行